

保育者とからだ

—ともにいるために感じたいこと—

竹早教員保育士養成所 高橋系子
駿河台大学 大貫秀明

1. 緒言 目的

待機児童ゼロ対策として保育者需要が高まって久しい。相変わらず求人はある。子どもが好きでこの職業を選んだ志願者達は職場の人間関係や雑務に追われ研修もままならぬ状態が続く。また、安全・衛生面にも気を遣う仕事も増えた。「保育者」と職業総称で呼ばれることはあるが保育者の個人名があげられることはなく、評価や自己有能感をうることなく職場を去る現状がある。

保育者の本業である保育において、子どもとの関係づくりに指標があれば、よりどころに乳幼児たちとのよりよい関係を築き、仕事を自身のやりがいのある生業としていけるのではないか。子どもとの関係づくりが寄り添いや保育のめざす指針にある「10の姿」の達成に大きな鍵をにぎる。「子どもの目線にたって」は当たり前に使われる言葉であるが、形骸化していることもある。オンライン授業などで現場経験不足等にもかかわらず、保育の質が求められる状況ではあるが寄与できる何かを提供できればと考える。

2. 方法

今まで行ってきた試みで「呼吸の盗み」「承認的なぞり」などからだを媒介とした共感的同調をもとにした行動を提案し、実習で学生に試みてもらったところ手ごたえを感じる学生もみられた。また乳幼児との関わりで学生たちが「成功」と感じたことをアンケートにより訊ねた。「視野に入る」「好きなあそびやおもちゃであそぶ」「名前を呼ぶ」などがあげられた。

今まで試みた実践を現場で応用できる一手段として提案していきたい。そのための裏付けとしてD.W ウィニコットの母子関係論、V. レディの「2人称的アプローチ」や佐伯氏の「ドーナツ理論」に確証を求める。

3. 考察

ウィニコットは母子関係で、発育のために母子双方向的な関わりづくりの重要性を言う。生後から幼児期に向かい絶対的依存期から母子分離独立に向かい環境との関わりが増えていくが、その時期（移行）に不安解消になるものを身の回りに置き、手放していく順を追うとしている。徐々に社会に向かい関係づくりが始まるとしている。

佐伯氏は成長につれ自己の世界で成り立っていた私（I）が他者との関わりにより人・モノを媒介

として「情動・共感」の理解が始まるとしている。接した他者が（You=同伴的呼びかけを向ける/向けられる他者）意識を持って接することで理解・共感を得やすくなるという。その時に関わった人・モノを媒体としてさらに社会規範など（They）の理解も進むとしている。それをドーナツ理論としている。

どちらも〈モノ・人〉が幼乳幼児の心身の自立・独立に役割を果たしており、意味を持つ。保育者は自身がそれらに代わるものとして存在することが要求される。これまでの発表者の試みから「視野に入る」は興味対象になることを知らせながら媒体としての存在を知らせること、その時は乳幼児の気持ちを汲み取りながら「仲良くなりたい」という意図をからだにもたせて向かい合うこと、また「子どもの好きなものや事で遊ぶ」は乳幼児たちとの双方向の情動の交換を可能たらしめるからだの存在を示すことが求められていることが推察された。

乳幼児たちとの関係づくりがうまくいく学生、いけない学生が見受けられるが、これらを基にさらに現場での実践応用を試みてみたい。

<参考文献>

- ・佐伯胖「子どものケアする世界をケアする」2007 ミネルヴァ書房
- ・著：D.W ウィニコット 訳：橋本雅雄他 「遊ぶことと現実」2015 岩崎学術出版社
- ・著：V. レディ 訳：佐伯胖 「驚くべき乳幼児の心の世界」2015 ミネルヴァ書房

他